自分が一九二〇年に英國に在つた當時には、此の書は大英博物館に保管してゐないとの事で、見る事を得ず、遺憾ながらロス氏がロートグラフに撮つて所藏して居つたものゝ第一卷、即ち001の方を寫眞して英京を去つたのであつたが、翌年再度英國を訪うた時に、又もや之が借覽を請うて、遂に同博物館で之を見、また002の寫眞をも撮ることを得④a たのは、自分に取つては今も淺からぬ思出である。佛教學者でもない自分が、何故にかくまで此の書に執著したかについては茲に少しく辯じて置く必要がある。自分が此の書のスタイン氏の蒐集中に存することを知り、また之が大英博物館に收藏せられて居ることを知り得たのは、無論スタイン氏の Ruins of Desert Cathay の記事に基づいたのであつて、纏つた書物の少い回鶻語の文獻の中に於て、かくまで多くの紙數を有し、且つ或程度まで完全なる形で傳はつて居るものは甚だ珍らしいので、之と共に記された他の二三種の寫本と共に夙くより注意して居つたものであつた。初めはこゝに記したやうに、之を大英博物館で見る事が出來ないで、大に失望したのであつたが、ロス氏のロートグラフ本を見て幾分その希望を滿たすと共に、之に對する興味は益々加はつて來たのであつた。それは丁度當時滯英中であつた東京帝國大學の木村博士から、安慧の倶舍論の疏といふものが、性質上甚だ珍らしいものであると聞いたに由るし、また此の回鶻文が普通の古代トルコ語の文體とは甚だ異つて、その措辭法や單語の構成に於て、著しく漢語の影響を受けて居ることを容易に看取し得たに由るからでもあつた。加之この寫本は、スタイン氏が倫敦に將來して以來、ロス氏を始め、歐洲の言語學者や佛教學者が屢々見たけれども、今尚滿足な解釋を得ないと聞いたのも、また自分の之に對する興味を喚起した理由の一つであつたと思ふ。顧れば爾來既に三星霜を經た。此の間始終念頭に存しながら、當時かくまで興味を覺えた資料に對して、いまだに大して研究